

## 特集にあたって

高橋 伸夫 (東京大学)

経営学分野で、ゲーム理論や決定理論の研究をしている研究者は少数派であろう。私自身のアイデンティティーも経営学者であるが、残念なことに、多くの経営学者は、こうした分野との間に一線を引いて閉じこもっているようにすら感じられる。

ところが、かつてはそうではなかった。近代組織論の金字塔的な業績であり、いまや経営組織論の古典である James G. March と Herbert A. Simon の *Organizations* を読めば、近代組織論が統計的決定理論やゲーム理論の強い影響を受けながら生成されたことは歴然としている。Simon や March の近代組織論は決定理論やゲーム理論の一つの発展した姿だとまで言えば、言い過ぎになるのか。 *Organizations* は、ゲーム理論に対する強い期待感と同時に、実証研究がほとんどないことも指摘し、組織論への貢献については最終的な判断を保留したままで終わっている。しかし、私のような経営学者は、決定理論と近代組織論との間の連続性に新鮮な驚きを覚えた。

そこでこの特集では、OR の専門家に、今までとは全く異なる角度からの経営学入門、経営組織論入門の試みを企画した。簡単に言えば、経営組織論の骨格を形成している決定理論やゲーム理論の側、いわば背中側から、経営組織論を眺め直してみようというのである。

まず、「経営組織論の中のゲーム理論・決定理論」では、近代組織論が、その生成期において、決定理論からどのように展開していったものなのかをその違いも明確にしながら整理している。その後、組織論はゲーム理論・決定理論と袂を分かつことになるが、最近になって、さらに組織現象のリアリティーを追求した「やり過ごし」や「見通し」に関する研究で、再度、接点を持つようになったことも紹介している。

次に、「組織的決定の分析フレームワーク」では、実際の組織の現場での意思決定分析に、決定理論と組織論のフレームワークが組み合わせられて使われた実例

を紹介している。キューバ危機の分析や製鉄技術採用の分析に、使われている姿を眺めることで、組織論と決定理論の考え方の違いもより鮮明になる。

組織論では、分析フレームワークとしてモデルを利用するだけではなく、モデル自体の分析も行われている。ただし経済学のような解析的な分析ではなくシミュレーションが中心である。「組織論におけるシミュレーション」では、組織論と OR のシミュレーションの使い方の違いを比較し、ゴミ箱モデルと呼ばれる意思決定モデルを例に、シミュレーションが経営組織論にどのように貢献しうるかを整理している。

実際、1990 年代に入ると、経営組織論の分野でも、協調行動の進化に関するゲーム理論とシミュレーションの成果を取り入れた議論が行われるようになってきた。「企業間における協調関係の形成」では、反復囚人のジレンマ・ゲームのシミュレーションを紹介し、最近になって組織論でゲーム理論が取り上げられるようになってきた背景とその理論について解説している。

他方、組織論が袂を分かった後の決定理論では、社会的選択理論や社会的厚生関数と呼ばれるような分野で目覚ましい展開があったし、心理学的な決定理論も一分野を確立するに至っている。「不確実性下の意思決定の実験」では、心理学的分野で、特に実験を中心とした研究に着目することで、その後の決定理論のもつ現代的な組織論的意味を考えている。

実は、動機づけモデルや組織設計論、組織活性化のような経営組織論のクラシックなテーマも、決定理論と密接に関係している。これらに興味のある読者には、拙著『組織の中の決定理論』(朝倉書店)をお勧めしておくことにし、この特集では、より新しい経営組織論のトピックスとの関連を中心にした。これだけの紙数で経営組織論の全体像が見えるわけではないが、OR の考え方に馴染んだ人にとっては、この特集は最新の経営組織論の考え方を理解する糸口にはなるはずである。